

音楽科教科主張

1. 音楽科における学び

子どもは、魅力的な音や音楽に出会うと「楽しそうな曲だから歌ってみたい」「好きな感じだからもっと聴いてみたい」「なんで心地よいんだろう」「どうすればこんなふう演奏できるのかな」など、様々な思いをもつ。そして、その音や音楽と関わる中で、自分の目指す表現が生まれ、音と向き合いながらくり返し試したり、友達と対話しながらよりよい音楽表現になるように吟味したりするなど、試行錯誤をしていく。そうすることで、徐々に目指す表現と音楽を形づくっている要素とが結びつき、知識や技能を獲得していきながら、音楽的な見方や考え方を広げたり深めたりしていく。そうして、音楽を形づくっている要素の働きが生み出す面白さや美しさを実感することで、子どもの感性が高まっていくだろう。そして、新たな音や音楽に出合った時、それまでの経験を生かしながら自分の目指す表現に向かって活動したり、音や音楽を味わったりすることができる。

このような学びをくり返していくことで、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わり、生涯にわたって音楽に親しんでいくようになるだろう。

2. 本校音楽科部が考える『その子らしく学ぶ』

音や音楽に出合った時にもつ思いは、「初めて聴く音だな、何だろう」「いろんな楽器の音がした」「この曲は速いな」とその子によって違う。そこには、今までの経験や感性などの「その子らしさ」が影響しているだろう。そうして思いをもった子どもは、音や音楽に自然と関わり始める。そして、自分の思い描く音を探そうと様々な楽器に関わったり、わずかな音の違いにこだわって最後までじっくり向き合ったりと、試行錯誤をしていく。

こうする中で、音楽を形づくっている要素を手掛かりに目指す表現に向かっていく。例えば、音色の違いに焦点を当てて考えた子どもは、「どの音がウグイスの音に合うかな」と様々な楽器にふれたり、「ウグイスは高い音がいい」とトライアングルを選んで「こっちの方が高いんだよね」と各辺を叩いたりして音色を比べる。また、拍に焦点を当てて考えた子どもは、グループで考えたリズムが拍に合っているかどうかを聴きとり、「待って。拍、拍。1, 2, 3, 4」と演奏を中断させてまで拍に合わせようとする。そして、拍に合うようにリズムを変えたり、何度も繰り返し練習したりしながら目指す表現に近づけていく。

さらに、自分の経験や感性をいかして友達に関わることもある。「ふわふわしているくじらぐも」を想像しトライアングルの音色がぴったりだと感じた子どもが「元気いっぱいに進んでいくくじらぐも」を想像し小太鼓の音色がぴったりだと感じた友達と関わることで、同じ場面でも様々な音のイメージがあることに気付く。そして、トライアングルと小太鼓を同時に鳴らしたらどんな音色になるか、どのように叩いたらイメージに合う音になるかを何度も試行錯誤し、目指す表現に近づけていく。

このように、自分の目指す表現に向かって試行錯誤する中で、音楽を形づくっている要素を手掛かりに目指す表現に向かったり自分の経験や感性をいかして友達に関わったりする姿が音楽科における『その子らしく学ぶ』であると考えている。

3. 『その子らしく学ぶ』を支える環境設定

子どもが、自分の目指す表現に向かう中で、その子なりに試行錯誤することができるよう、以下のことを大切にしていく。

- ・題材を構想する際には、曲や活動の関連性を考える
- ・題材を通して『その子らしく学ぶ』ことができるよう、その子をとらえて材との出会いの場を工夫する
- ・自分の目指す表現により向かえるように、友達と関わる時間を設定したり、グループの分け方を工夫したりする
- ・目指す表現や話し合う視点が明確になるように、題材で主に扱う要素を絞る

1. はじめに

子どもは、魅力的な音や音楽に出会うと「楽しそうな曲だから歌ってみたい」「好きな感じだからもっと聴いてみたい」「どうすればこんなふうに演奏できるのかな」などの思いをもつ。その中で、自分の目指す表現が生まれ、音と向き合いながらくり返し試したり、友達と対話しながらよりよい音楽表現になるように吟味したりするなど、試行錯誤をしていく。これは、これまでの『その子らしく学ぶ』研究2年次までに確かめられたことであり、3年次においても変わらず大切にしていきたいことである。このようなこれまでの研究を踏まえながら「心の動きを伴う経験によってその子に還るもの」という視点で『その子らしく学ぶ』をよりつぶさに見取ることで「音楽科における学び」や『その子らしく学ぶ』の可能性を広く深く探り、価値を見出していきたい。

2. 研究の目的と方法

音楽科の授業において、どのような『その子らしく学ぶ』が見られるのか、また『その子らしく学ぶ』にどのような可能性や価値があるのかについて「心の動きを伴う経験によってその子に還るもの」を視点として、子どもの姿をもとに広く深く探り、見出すことを目的とする。なお、分析するにあたり、抽出児を置き、動画記録の中で見られた発言や行動、実際の演奏や授業で使用したワークシート、振り返りなどを分析対象とし、子どもの思いや目指す表現、試行錯誤のプロセス、また、その背景にあるものなどを検証していく。

3. 研究の内容

(1) 6年「いろいろな音のひびきを味わおう」(器楽)

①題材の概要について

本学級の子どもは、自分の思いを素直に表現することができる。4月に委員会決めた際には、希望する委員会に対する思いを一人ひとりが学級全体に向けてスピーチした。「僕が放送委員会に入ったらこの附属小をもっと盛り上げたい」「去年できなかった音楽委員のプロジェクトを実現させたい」など、それぞれの思いを伝え合った。また、運動会の応援練習やつどいに向けての話し合いでは、自分が思っていることを思い思いに発言し、話し合いが進んでいくことが多い。普段発言が少ない子も、グループの中では発言したり、振り返りに自分の思いを書いたりする姿があり、自分なりの思いをもっていることがうかがえる。しかし、自分の思いが強いからこそそのぶつかりもある。運動会の綱引きでは、「姿勢を低くした方が体重がのせやすい」という考えをもつ子と「低い姿勢だと後ろに引きにくくて耐えるのが難しいからすぐに後ろに引いた方がいい」という考えをもつ子で意見がぶつかった。実際にどちらの作戦も試してみるようになったが、手ごたえも人それぞれで、結局どちらの作戦にするかを決めるまで何度も話し合うことになった。「勝ちたい」という思いは同じだが、自分の意見を優先する子が多く、他者の意見を尊重したり、受け入れたりすることがうまくできない様子が見られた。その一方で、応援練習では、応援団長を中心に何度も練習を重ねながら意見を出し合い、お互いの意見を受け入れる姿が見られた。声や動きの大きさはもちろん、全員で動きが揃っているかについても考え、どうすればみんなの動きが揃うのかを話し合った。また、青組全員が揃うように、朝の応援練習で細かい指示を出したり、各学年の並び方を工夫したりする姿もあった。応援合戦で1位を取りたいという同じ目標に向かって進んだ運動会当日は、下級生に声をかけたり、気合いを入れる円陣を組んだり青組が一つになって取り組む姿があり、練習の成果を発揮することができた。このように、一人ひとりの思いが強いからこそ、ぶつかることもあるが、それらが重なることで何かをつくり上げた時の達成感や満足感は大きくなるだろう。さらに、他者の意見を尊重したり、受け入れたりすることによって、全員でつくりあげる喜びを味わってほしいと考えた。

音楽の授業で「翼をください」の合唱を行った際には、歌詞から読み取れることを共有した。同じ歌詞でも捉え方が違うことを共有し、作詞家の意図をどう伝えていくかについての自分の考えを伝え合った。ソプラノとアルトに分かれて練習した後、初めて二部合唱を行った際には、各自が思うままの表現の仕方であう姿があった。歌うことを楽しんでいる様子は見られたものの、みんなで音を合わせるとい意識はあまりないように感じた。実際に、その日の振り返りでは「自分はきれいに歌えた」「正しい音程で歌うことができた」と個人の振り返りをする子が多く「もっと声を合わせたい」「ソプラノとアルトのバランスに気を付けたい」という思いをもつ子は少数だった。次時で自分たちの歌った動画を見た子どもは、ソプラノとアルトの音程やタイミングが揃っていないことに気付き、音を合わせるための方法として「指揮者が必要」「メトロノームを使う」「タンバリンなどの楽器を入れたらどうか」などの意見を出し合った。そして、実際に指揮者を立てて練習し、音を合わせようとする意識を高めていた。このような様子が見られるからこそ、音を合わせることに着目し、合わせることで得られる達成感や満足感を味わってほしいと考えた。

今回の題材は「音色」に焦点を当て、曲想と音楽の構造との関わりを捉えていった。扱う楽曲は「最高到達点」(SEKAI NO OWARI)である。この曲は、人気アニメの主題歌になっており、子どもにとって聴きなじみのある曲であるとともに、主な旋律は八分音符が多く使われており、拍を感じたりタイミングを合わせたりしやすい構成になっている。また、曲の構成を主な旋律、かざりの旋律(副次的旋律)、和音、低音パートに分け、それぞれの役割を理解しながら学習を進めていった。そのため、様々な楽器の音色の組合せから生まれる響きの美しさや豊かさなどを味わいながら音楽を聴いたり、パートの役割を理解して全体の響きの中で音色や音量のバランスなどを工夫しながら合奏したりできた。「音色」に焦点を当てたり「合わせる」を意識したりすることで、友達の演奏をしっかりと聴き、音を合わせて表現する喜びを味わうことができただろう。また、楽譜通りに演奏することではなく、みんなで音を合わせることをねらいとしていたため、できない部分は同じパートで補ったり自分が挑戦できそうなフレーズのみを演奏したりと楽器演奏が苦手な子も得意な子と一緒に演奏することができ、どの子も前向きに取り組むことができたのではないかと考える。みんなで完成させる合奏だからこそ、主な旋律にはどの音色を選ぶか、木琴と鉄琴の音の重なりはどうかなど、活動する中で試行錯誤する場面も多く見られた。その際に、どうしてその楽器の音色を選んだのか、音を合わせるためにはどんな方法があるかなど、自分の思いや意図をもって表現し、それを伝え合うことでよりよい音楽をつくっていく面白さや楽しさを実感してほしいと願い、本題材を構想した。

②題材の実例

「いろいろな音のひびきを味わおう」(器楽)(全10時間)	
第①時	AとBの曲を鑑賞しよう <ul style="list-style-type: none"> ・楽器の構成の異なる「最高到達点」を鑑賞し、感じたことや気付いたことを共有した ・楽譜を配付し、4つのパートに分かれていることやパートの役割を確認した
第②時	どんな合奏にしたいか思いを伝え合おう <ul style="list-style-type: none"> ・曲のイメージを曲想や歌詞をもとに考え共有した ・それぞれのパートにはどの楽器が合うかを楽器を鳴らしながら考えた
第③時	楽器の音色を確かめながら楽器を決めよう <ul style="list-style-type: none"> ・自分が考えた楽器の構成をグループで共有しパートの楽器を選択した ・それぞれが担当するパートや楽器をグループで話し合った
第④時 第⑤時 第⑥時	2つのグループに分かれて練習しよう <ul style="list-style-type: none"> ・自分の担当する楽器を練習したり、グループで合わせたりした ・合奏した時の楽器のバランスを話し合い、楽器の再検討をした

第⑦時	中間発表会をしよう <ul style="list-style-type: none"> ・お互いの演奏を聴き合い感じたことや気付いたことを共有した ・相手のグループから指摘された点について話し合った
第⑧時 第⑨時	発表会に向けて、2つのグループに分かれて練習しよう <ul style="list-style-type: none"> ・合奏の完成を目指して、自分たちの演奏を見直した ・発表会に向けて、再びグループに分かれて練習をした
第⑩時	発表会をしてお互いの演奏を聴き合おう <ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの思いが伝わるよう、楽器の構成や工夫した点について説明してから合奏をし、互いの演奏を聴き合った ・合奏を通して考えたことや感じたことを振り返り、共有した

③抽出児の『その子らしく学ぶ』

ア 楽器の音色にこだわり、パートの役割に合った楽器を考える姿

A 男は、普段から曲を聴く際「どんな楽器が使われているか」「聴こえてくる音色はどんな感じに聴こえるか」など「音色」に着目する姿がある。これは、A 男がもともと持っている感性と A 男が和太鼓を習っていることが関係しているのではないかと考える。本実践の中でも「音色」にこだわる姿が多く見られた。

第①時、A（鉄琴、リコーダー、鍵盤ハーモニカ、ピアノで演奏された曲）と B（木琴、鉄琴、オルガン、バスマスターで演奏された曲）を鑑賞した A 男は「A は鉄琴だね。主が鉄琴。B は木琴と鉄琴両方とも使ってると思う」と楽器の「音色」に着目した。さらに、楽器の数にも着目し「A は楽器の数が少ないから一つ一つの音がはっきりしている」と「音色」の聴こえ方と楽器の数を関連させながら考える姿があった。教師から「A と B は同じ楽譜で演奏されている」と聴くと「あー」と納得したような反応を示したが「楽器の数は変わらない」と聴くと「え？ そうなの？」と驚いたような反応を示し「これ（バスマスター）でしょ？ ちょっとした打楽器でしょ？ 低い音だと多く感じるから」と、なぜ楽器の数が多く聴こえたのかを分析する発言があった。そして、パートに合った楽器を選び始める場面では「明るい音がほしいからオルガン。バスマスターは打楽器みたいな感じがほしい。かざり（のパート）はどうしよう」と、それぞれのパートにはどの楽器が合うかを理由とともに考える姿があった。「合奏」という活動に対して「こういう演奏をしたい」という「目指す表現」が A 男にあったのではないかと考える。

第②時、実際に楽器を鳴らしながらパートに合った楽器を選択していく場面では、バスマスターやオルガンの設定を変え、様々な音色を試したり、鉄琴のマレットを変えて試したりと楽器だけでなく「音色」にもこだわって考える姿が見られた。その際は、楽譜に記譜された旋律を弾きながら何度も試して聴く姿があり、実際の演奏を想定しながら楽器を選択していることがうかがえた。

第④時、グループでパートに合った楽器を決める場面では「この前 B 男と決めた音色がある」と、前時までにこだわって選んだバスマスターの音色について話す姿があった。そして、自分が担当するキーボードも初めは鍵盤ハーモニカのような音色を探して演奏していたが、フルートやクラリネットの音色を試して聴き比べる姿があり、ただその楽器で演奏するのではなく楽器の「音色」にもこだわりたいという A 男らしさが表れていた。

このように、「音色」にこだわる A 男だからこそ「合奏」に対する「目指す表現」が明確になり、パートごとの「音の重なり」やパートの役割に合った楽器を考える姿につながったと考える。

イ 音を揃えようと何度もグループの友達に働きかける姿

A 男はこれまでの音楽の授業でも「みんなで音を揃えよう」と働きかける姿があった。合唱の活動では、曲に合わせて手で拍をとり、みんなの声が揃うように働きかけた。これは、習い事の和楽器を演奏する際に「みんなで音を合わせる」という経験をしている A 男が「音が揃うことのよさ」に気付いているからなのではないかと考える。

第②時で「どんな合奏にしたいか」と問われたA男は、「みんなの想いが一つになる。全員が楽しめるように。みんなの気持ちを合わせたい」という思いをもった。これまでの音楽の授業で「揃える」ことを意識してきたA男だからこそ生まれた思いだと考える。そして、第④時でグループの楽器が決まり練習が始まると、メトロノームやオルガンのビートを流し、拍に合わせようとする姿が見られた。しかし、それぞれのパートの拍が全く合わなかったことから、どうやったらみんなの音を揃えることができるかを考え「どこをやってるか分からなくなっちゃうから、主な旋律に合わせると思うんだけど、木琴の音がオルガンとバスマスターの音に負けて聴こえないと思う。だから打楽器を使ってリズムをとった方がいいと思う」とグループに提案した。(図1-1)「メトロノームなどの拍に合わせたり、打楽器を入れてリズムをとったりすることで音を揃えることができる」と知っているA男だからこそで提案だと考える。また、パートの役割に合った楽器を自分たちで選択するという環境や打楽器パートが記譜されていないという状況により、主な旋律や低音パートなど、それぞれのパートの役割を理解しながら活動していったことで「音が揃わない」という状況が思考の加速を生み、新しい提案につながったのだと考える。



図1-1 グループの友達に働きかけるA男

第⑤時からのグループ練習では、A男の提案通り小太鼓が合奏に加わった。これは、A男にとって自分の考えが他者に認められたと感じたであろう場面である。提案したA男が小太鼓を担当することに決まり、合奏の練習が始まった。練習の際には、自分の楽器の練習よりも、譜読みができずに困っている友達に教えたり、拍にずれてしまう友達に「合わせて」と声をかけたりする多く姿が見られた。自分の提案が他者に認められたことで、周囲に対して声をかけることの安心感や自分の考えへの自信につながったのではないかと考える。

第⑥時でA男は、次時の中間発表会を見据えてグループの話し合いを進め、みんなで音を揃えることができるように、主な旋律を担当する木琴と鉄琴を中央に配置することや小太鼓とバスマスターを近くに配置することなど、それぞれの楽器の音を聴こえやすくすることで揃えることができるように楽器の配置にこだわる姿が見られた。このような考えからも「音を揃える」ということにこだわっていることがうかがえる。

ウ 他者と関わる中で自分の考えを更新していく姿

第①時、AとBの曲を聴き比べた際、A男は「音色」に着目して聴く姿が見られたが、友達から「Bの方が本物（原曲）に近い」「Aの方がきれいに聴こえた」など、原曲との比較や曲想に着目した発言を聴いて「きれいにしたいならAだけど原曲に近づけるならBってことか」と納得したような発言をし「Aの方が好き」と自分の考えを伝えた。おそらく原曲に近づけるよりも楽器の音色の重なりがきれいだと感じた方を選んだのだろう。その後、友達と意見を交流する中で、C男の「Aが好きだけどBの方がしっくりくる」D男の「Bの方が楽しい感じがする」E男の「Bは打楽器があって楽器の数も多い」など、Bの演奏のよさを聴いた。そして、「Bはみんなできんならパートができる」とBのよさにも納得し「俺はBだな」と意見を変える姿が見られた。「みんな」という発言から、合奏は自分ひとりではなくみんなでつくるものであることを考えている様子や今後楽器を決めて演奏することまで見通しをもっていることがうかがえる。「音色」に着目していたA男は、主な旋律が鉄琴で演奏されているAの演奏のきれいに魅力を感じAの方が好きと考えていたが、友達との意見の共有を通して、Bの曲が原曲に近いことや曲想が明るいこと、楽器の種類や数が多いことに魅力を感じて意見を変えたのではないかと考える。

第②時、グループに分かれてパートに合った楽器を選ぶ場面でA男は、主な旋律の楽器について「卓上鉄琴と鉄琴（がいい）」とグループの友達に伝える。しかし、グループの大半が「鉄琴と木琴」という意見に賛同しており、A男の考えとズレが生じる。そこでA男は「木琴と鉄琴は合わない」と「音色」を意識しながら必死に伝える姿が見られた。鉄琴の音色を二種類重ねる理由として「卓上鉄琴は固い音で鉄琴は柔らかいイメージ」と同じ鉄琴でも音色が違うため、それを重ねることによさがあることを伝えた。自分の考えの根拠を明確にもっていたA男だからこそ、合う理由や合わない理由を伝えることが

できたのだろう。これらのA男の考えに対して友達から「鉄琴が多いと高い音でキンキンするから二つはいらない」と返され、話し合いを重ねた末に「主な旋律は鉄琴と木琴の組合せ」という意見で決定した。これに対してA男は少し納得がいけない様子を見せたが、すぐに主な旋律を鉄琴と木琴で演奏しているデモ音源を聴きながら「音が重なっても意外と全部の楽器の音が聴こえる。あとは、楽器をやる人数次第かな」と「音の重なり」に着目し、木琴と鉄琴の音を重ねてもあまり違和感はないことを確認した。A男の意見は通らなかったが、他者の意見を受け入れる姿が見られたことから、他者の考えに納得し、別の楽器の「音色」を重ねるよさを実感していたのではないかと考える。

第④時、グループで合奏をした際、音を合わせるためにメトロノームの代わりにオルガンのビートを流しながら練習をしていた。しかし、なかなか音が揃わない様子から「打楽器を使ってリズムを取ったほうがいい」と提案する。そして第⑤時、グループでの作戦会議で小太鼓を入れることが決まり小太鼓で拍を刻みながら練習をする姿が見られた。(図1-2) この時点で



図1-2 小太鼓の練習をするA男

A男にとっての小太鼓はあくまで音を合わせるためのメトロノーム代わりであり、音が揃うようになってきたら必要ないと考えていた。練習と作戦会議を何度も重ね迎えた第⑦時の中間発表会では、自分たちの演奏に対して「楽譜にはない小太鼓を入れていてよかった」とA男が提案した小太鼓への友達からの肯定的な意見があった一方で「小太鼓がずれるところがあった」「バランスがよくない。太鼓がうるさい」という批判的な意見もあった。

そのため、その後の作戦会議で「今まで小太鼓は音とり（メトロノームのかわり）っていうかタイミングを合わせるために使ってたじゃん？音を小さくすると余計ずれちゃうんだよ。音とりのために使ってるんだから本番はいらんんじゃないかな」とあくまで小太鼓は音を合わせるための手段で、合奏がある程度完成してきたら必要のない存在であることを伝えた。(図1-3) しかし友達から「太鼓は曲を盛り上げるために入れたい」「音を合わせるためだけでなく曲の盛り上がりには太鼓が必要」と言われ、今回の合奏における小太鼓の役割は音を揃える



図1-3 グループの作戦会議を進めるA男

るためだけではないと気づき、小太鼓を入れる目的を更新する姿があった。第⑦時までは、小太鼓で拍を刻むことしかしてこなかったA男だが、第⑧時の練習では四分音符と八分音符を組合せてリズムを奏でたり「タッタカ」や「タカタッタ」などのリズムを取り入れたりするなど、小太鼓のたたき方を模索する姿が見られた。「単なる音を合わせるための小太鼓」という考えから「曲を盛り上げるための小太鼓」というようにA男の小太鼓の役割に対する考えの変容が見られた場面だった。

このように、自分の考えを他者に伝えながら他者の考えのよさも認め、自分の考えを更新していく姿が多く見られた。

(2) 1年「いいおとみつけ！～おとでジャンケンポン～」（音楽づくり）

①題材の概要について

本学級の子どもは、歌うことや音楽に合わせて体を動かすことが好きである。これまでの学習の中で、歌詞の表す様子を想像しながら歌ったり、曲の感じや速度に合わせて身体表現やリズム打ちをしたりする活動を行ってきた。中でも『かもつれっしゅ』『しろくまのジェンカ』は人気で、子どもからのリクエストが多く、楽しく活動する姿が見られた。しかし、どちらの曲も一人ではなく複数人で列をつくって動くため、一人ひとりの動く速さが違うことで列が分裂したり衝突したりしてしまう。初めはそのうまくいかなさを感じている姿も見られたが、回数を重ねるごとに、伴奏や友達の歌声によく耳を傾けたり、前の人を見て動きを合わせたりする子どもが増え、列を崩さず動けるようになっていった。そして教師が伴奏の速度や強弱を変えるとすぐに気付いて、動く速さや声の大きさを変えて楽しんだ。簡単にできるものよりも、多少の難しさを感じてそれを解決していくことに子どもは楽しさを感じているように思う。それだけ音楽活動に意欲的なことがうかがえる。

また楽器への関心も高い。学習の中でどんな楽器を知っているかを尋ねた際には、「バイオリン」「エレクトーン」「ドラム」など様々な楽器の名前が挙げられた。「つどい」の時間に音楽委員会が器楽合奏をした際には、それまで友達と会話を楽しんでいた子どもや別の方向を向いていた子どもも顔を前に向け、演奏にじっくりと耳を傾けていた。「つどい」の後に行った振り返りでは「鉄琴の音がすごくきれいだった」「音が響いていた」など多くの子どもが演奏についての感想を述べた。これまで学習の中で扱ってきた楽器は、主に「鍵盤ハーモニカ」と「タンバリン」だが、それ以外の「鉄琴」「木琴」「バスマスター」「リコーダー」など様々な楽器の生の音色を耳にしたことで、子どもの楽器への関心はさらに高まったように思えた。

このように、音楽活動に意欲的で楽器への関心が高い子どもたちだからこそ、これまで生活の中に馴染んでいた「音」の存在や楽器やその鳴らし方による「音色」の違いに気付くことで、よりよい生活や豊かな音楽表現につなげていってほしいと願った。そこで本題材は、「音色」に焦点を当てて音楽づくりの活動を行った。「音でジャンケンをしよう」という活動に向かうために、子ども一人ひとりが「音色研究員」とであるという設定のもと、様々な「音」をじっくりと聴く活動を行った。まずは生活の中に馴染む「音」を扱うことで、楽器では出すことのできない音のおもしろさに気付く、意識的に音を聴いて生活したり、音や音楽をより身近な存在であると認識したりするだろうと考えた。

音楽づくりのテーマとしては「ジャンケン」を扱った。ジャンケンは子どもにとって非常に身近であるからこそ、創作意欲の高まりや日常生活と音楽とを自ら結びつけていく姿を期待した。「グー」「チョキ」「パー」の3つの音色を選択する場面では、言葉そのものがもつ印象や、出した時の手の形がもつ印象、具体物がもつ印象（石・はさみ・紙）など、子どもは様々な視点から音楽づくりの発想を得ただろう。また、「ジャンケンポン」という短い音楽だからこそ、一発の音色にこだわって楽器を選択したり鳴らしたりしたのだろう。

このように、子どもは本題材を通して様々な「音」の存在に気付く、音色の違いにふれていくことで、音に敏感になっていった。そして、日常生活の中のあらゆる音の感じ方が豊かになり、今後の音楽活動においても、自分の出す声や楽器の音色など「音」にこだわって、より豊かな音楽表現を目指していけると願い、本実践を行った。

②題材の実際

「いいおとみつけ！～おとでジャンケンポン～」(音楽づくり)(全6時間)	
第①時	身の周りからいろいろな音を探してみよう(身の周りの音研究) <ul style="list-style-type: none"> ・身の周りの音クイズを行い、音の正体について生活経験などを基に考えた ・「音色」「強弱」「高低」の視点で教室や廊下、靴箱などから様々な音を見つけた
第②時	打楽器の音色を研究しよう(打楽器の音色研究 その1) <ul style="list-style-type: none"> ・7つの打楽器(トライアングル・アゴゴベル・ウッドブロック・カスタネット・エッグシェイカー・タンバリン・すず)を鳴らし、音色の違いに気付いた ・音色を自分なりの言葉で表現し、音色の響きとその美しさを感じ取った
第③時	打楽器のいろいろな音色や鳴らし方を見つけよう(打楽器の音色研究 その2) <ul style="list-style-type: none"> ・グループに分かれて楽器の持ち方やたたき方、振り方等について意見を交わした ・一つの楽器から様々な音色を出すことができないかを考えた
第④時	自分だけの「音色ジャンケン」を考えよう <ul style="list-style-type: none"> ・ジャンケン(グー・チョキ・パー)を楽器の音色で表現するために様々な楽器を鳴らした ・自分なりの根拠をもって楽器を選択し、友達にクイズを出したり実際に音色ジャンケンをしたりして、音楽づくりの発想を得た
第⑤時	たくさんの友達と音色ジャンケンを楽しもう <ul style="list-style-type: none"> ・前時での自分の考えをもとに多くの友達と音色ジャンケンをした

	・自分と友達の音色に対するイメージの違いに気付いた
第⑥時	楽器の音色を音楽に合わせて鳴らしてみよう ・「やきいもグーチーパー」にどう楽器の音色を入れたら歌が面白くなるか考え、演奏した

③抽出児の『その子らしく学ぶ』

ア 音や言葉で正確に表現しようと試行錯誤する姿

本実践の中で、C 子は何度も身の周りの物をたたいたり楽器を鳴らしたりして、その音色をくり返し聴きながら自分の思いや考えを正確に表現しようとする姿が見られた。

第①時、大きい音を探しに靴箱へ向かった C 子は自分の靴を持つ。その靴を 3 回靴箱にたたきつける動作をくり返し「これって大きい音だね？」と一緒に活動していた D 子へ伝えた。(図 2-1) そして聞こえた音を「トントントン」と擬音語で表現し、さらに同じたたき方で何度も音を出した。その姿は、自分が感じ取ったことや表現したことが本当に適当であるのかを念入りに確かめているようであった。



図 2-1 靴箱の音研究をする C 子

第③時、C 子はトライアングルの音色研究で内側と外側を交互にたたき鳴らし方を発見する。「なんかさ、外と中でやると音が違う」とつぶやき、その後何度も内側と外側をたたいて音色の違いを確かめた。しばらくして外側の音色を「リーン」と表現し記入するが、内側についてはすぐに記さず再度トライアングルを鳴らす。C 子は感覚的にトライアングルの内側と外側の音色の違いを捉えているが、それをどのような擬音語で表現することが適切なのか考えていたのだろう。その後、何度も内側のみをたたいて音色を聴き、最終的には「ディーンドンまたはコンコンコン」と二つの擬音語で表現することに辿り着いた。

第④時、C 子はジャンケンに合う音色を選ぶために 7 つ全ての楽器を順番に試した。一回ずつ試し終えた時には、グーにウッドブロック、チョキにトライアングル、パーにタンバリンを選択し、C 子なりの音色ジャンケンが完成した。しかし、その後も鳴らし方やリズムを変えて長い時間、様々な楽器を試し続ける。(すずは 4 回、タンバリンとウッドブロック・カスタネットは 3 回、アゴゴベルとエッグシェイカーは 2 回、トライアングルは 1 回) 日頃から適切な答えや正解を見つけ出すことに学ぶことの価値をおこうとする C 子にとって、これまでの自身の感性と経験を信じて自分なりに楽器を選択するこの活動は悩ましい状況であったかもしれない。C 子の中に「間違えたくない」「正しくありたい」という思いがあったからこそ、自分なりの音色ジャンケンの完成という目指す表現に向かって対象(楽器)と何度も関わったのだろう。

イ 音色にこだわる姿

第②時、E 子からウッドブロックの音色について「この音なんだと思う？」と尋ねられる。「コッチン」とつぶやくが、再度音色を聴いてから「キントントントンだっけ」と訂正する。E 子は「楽器が同じなのになんで音が変わるの？」と聞き返すが、それに対し C 子は「キン(右)トン(左)」と言いながらウッドブロックの左右をゆっくりたたいて説明した。(図 2-2) 左右を変えたことで生まれた音色の違いにこだわり「コッチン」から「キントントントン」へ表現を更新していったのだろう。



図 2-2 D 子、E 子と交流する C 子

第③時、C 子は前時で「いい音」と話していたトライアングルの音色をくり返し聴いた。内側と外側の音色、連打した時の音色、地面に付けて鳴らした時の音色、ビーターの本数を増やした時の音色など、様々な鳴らし方による音色の違いを見つけ、その違いを正確に言葉で表そうと何度もトライアングルを鳴らす姿が見られた。全体共有の場ではみんなに紹介したい音色として「一回たたいて音が無くなるまで聴いたらめっちゃくちゃいい音」とトライアングルの響き(余韻)の音色を実際に鳴らして見せた。すると学級全体から「確かに！」という共感的な反応が返ってきて、C 子は満足そうな表情を見せていた。

自身が感じ取った「めっちゃいい音」が他者にとってもそうであったことは、適切な答えや正解を見つけることができたというC子の満足感や達成感にもつながっただろう。

最終時である第⑥時で「やきいもグーチーパー」の中の「チー（チョコキ）」を担当することとなったC子は、トライアングルを選んだ。楽器を持って席に着くと、しばらく様々な鳴らし方を試していたが、曲に合わせての練習になると、「チー」という歌詞の部分に合わせてトライアングルの内側の下部を1回たたいて音を出した。「チー」という歌詞の響きに一番近い音色を見つけたからではないだろうか。またC子は演奏において縦を揃えることを大事にする傾向にある。今回の活動でも楽譜が配られるとすぐに楽器を鳴らすタイミングを書き込んだり、自分の担当する「チー」の部分以外も、仲間のためにトライアングルで拍を刻んだりする姿からC子の3人で縦を揃えて演奏したいという思いがうかがえた。さらにトライアングルの内側でなく外側をたたくことで音色を変えたり、友達が担当する「グー」や「パー」の部分には休符を入れ、音色同士が重ならないようにしたりするなどこだわりをもって演奏する姿も見られた。（図2-3）



図2-3 トライアングルを演奏するC子

複数人で縦を揃えて演奏することの難しさや音楽における揃えることの大切さに気付いていたC子が、音色の違いにこだわり、トライアングルにじっくりと向き合ってきたからこそ、最終時には単に楽器を鳴らすのではなく「歌詞に合う楽器の音色で、縦を揃えて演奏したい」という目指す表現に向かって、こだわりながら演奏することができたのだろう。

ウ 他者と関わりながら活動する姿

一年生という発達段階の子どもが、普段から仲のよい友達と活動を共にすることはよくある。本実践でも、C子は普段から交流のあるD子に誘われ、何度も活動を共にした。

第①時、C子はラミネートされた紙を鉛筆でたたいた音を面白い音とした。しかしD子はそれを小さい音とし、二人の考えに違いが生じた。他にも、傘立てを鉛筆でたたいた音をC子は「たんたんたん」と表現するが、D子は「こんこんこん」と表現し、ここでも二人の考えに違いが生じた。このような、その子の感性による考えの違いは、第②時でも同様に起こった。そのような場面でC子は、自分の考えを一方的に押し付けたり強く説得したりせず、D子の考えに合わせてワークシートに記入した。そのため、二人のワークシートは、一言一句同じ書きぶりになっていた。

第④時、C子は手のひらをパーやグーの形にしながらタンバリンの音色を試した。手の形による音色の違いを聴いて、よりイメージに近いものを選びたかったのだろう。一方のD子は、タンバリンを自分で鳴らすことなく、C子の鳴らした音を聴いて「パーだね」と自分の考えを伝えた。C子はD子の発言を受けてタンバリンをパーに選択し、次の楽器へ進む。自分の考えが具体的にもてていなかったため、自信をもって「パー」と断言したD子に合わせたのかもしれない。（図2-4）その後もD子と共に活動を進めるが、D子の活動のペースが速すぎてトライアングルでは楽器を触ることすらできなかった。楽器を数回鳴らして満足するD子と、音色の違いにこだわりじっくり楽器を鳴らす自分の学び方の違いを実感したのか、次のウッドブロックへ向かう際、D子を追い越し自分のペースで活動し始めた。（図2-5）



図2-4 D子の考えに合わせるC子



図2-5 自分のペースで活動するC子

これまでD子と共に学びを進めてきたC子であったが、単元が進む中で自分の思いや考えが強まり、目指す表現が明確になっていった。そしてそれを実現していく中で、他者（D子）よりも楽器という対象と強く結び付いたために、行動に変容が見られたのだろう。

（3）6年「みんなでつくる『あゆみ SONG』」（音楽づくり）

①題材の概要について

本学級の子どもは、自分の思いを素直に表現することができる。音楽の授業においては、自分の思いを友達と伝え合い、どんな歌唱や演奏にしたいかについて目指す表現を共有しながら活動を行ってき

た。「翼をください」(合唱)では、どんな合唱にしたいかについて、歌詞や楽譜から読み取ったことをもとに考え「作詞者が子どもの頃からの願いだと言っているサビの歌詞は願いが伝わるようにはつきり歌いたい」「サビの前にクレッシェンドがついているからもっと大きく歌いたい」など、表現に対する思いや意図を伝え合いながら練習を進めた。ソプラノとアルトのパートのバランスを把握するために、自分たちの演奏を録音して何度も聴いたり、出だしを揃えるために指揮者を立てたりと自分たちの目指す表現に向かって何度も試行錯誤しながら曲の完成を目指す姿が見られた。この題材の振り返りでは「みんなでいっぱい練習したからこそよい合唱になった」「みんなの声が一つにまとまっていくことが分かった」など、声を合わせることで生まれる一体感や何度も試行錯誤することで目指す表現に近づく達成感を味わうことができた。7月の教科研の実践「いろいろな音の響きを味わおう」(合奏)では、主な旋律、かざりの旋律、和音、低音の4つのパートをどの楽器で演奏するかについてグループで話し合いながら活動を進めた。「主な旋律は明るく演奏したい」という思いをもった子どもは「鉄琴の音色にしよう」と考え、友達と関わる中で「主な旋律の細かいリズムを鉄琴でたたくより、音が伸びるかざりの旋律を鉄琴にした方が明るくなる」と音色の特徴をいかして楽器を選択する姿が見られた。また、「音を合わせたい」という思いをもった子どもが「小太鼓をメトロノーム替わりに入れよう」と考え、グループで話し合う中で「小太鼓は拍を打つだけじゃなくて曲を盛り上げるために入れたらどうか」という友達の考えを受け入れ「みんなの音が全部聴こえる合奏」という目指す表現に向かって何度も試行錯誤する姿が見られた。このように、自分の思いを素直に伝えられるからこそ、互いに思いを伝え合い、何度も試行錯誤しながら目指す表現に向かって主体的に取り組むことができたと考える。表現領域の歌唱と器楽において、このような姿が見られた子どもだからこそ、音楽づくりにおいても、自分の思いや意図をもって取り組むことができるだろう。音楽づくりは、自分の思いや意図を自由に表現することができる。だからこそ、つくった音や音楽をもとに互いの思いをぶつけ合うことで目指す表現に向かうことができるだろう。それにより、みんなで一つの音楽をつくり上げることができた達成感や満足感を味わうとともに、自分の思いを音や音楽で表現することができる楽しさをこれまで以上に感じてほしいと考えた。

そこで、本題材では、音楽づくりの中でもより自由に表現でき、表現の幅がある旋律づくりの活動を行った。今回は「学級ソングをつくろう」という課題を提示した。一人ひとりが自分の担当する部分の旋律をつくり、それをつなげていくことで自分の思いを音で表現することはもちろん、みんなで一つの音楽をつくる活動ができると考えた。また、本学級の子どもは、自分たちの学級のよさを「明るくて元気」だと考えており、6月に行った「つどい」でも、この学級文化を全校に伝えようとするほど、自分たちの学級文化に誇りを感じている。そんな子どもに今回の課題を提示することで、より自分たちの学級への所属感を高めるとともに、卒業を控える6年生としてより学級の団結が強まるのではないかと考えた。そして、自分の思いや意図をもって表現した旋律を他者と共有し、目指す表現に向かって試行錯誤することで、感性が高まり、音楽に親しむことを願った。

また、今回は和音に合う音という制限はありつつもリズムや音の高低などある程度の自由度があり、自分の思いを音で自由に表現することができる。しかし、思うような旋律がつくれなかったり、どのような旋律にしたらいいか迷ったりする子どももいるだろう。そこで、今回は歌詞をあらかじめ決めておいてから授業を進めていった。どんな曲をつくりたいかをあらかじめ共有しておくことで、目指す表現のイメージがより具体的に共有されるだろう。イメージが共有されていることで、歌詞に合う旋律をつくる際に使う音や歌詞の文字に合ったリズムを考えることが焦点化され、見通しをもつことができると考えた。さらに、個人で旋律をつくる際には、基本的にGarageBandを使用した。GarageBandで作業することで、誰でも簡単に旋律がつけられることはもちろん、録音機能を使って録音することで再現性のある旋律をつくることができ、何度も試行錯誤しながら旋律をつくることができるだろう。また、和音と同時に音を重ねることができるため和音に合っているかどうかの判断もしやすいだろう。

これらの活動を通して、みんなで一つの音楽をつくり上げることができた達成感や満足感を味わうとともに、自分の思いを音や音楽で表現することができる楽しさをこれまで以上に感じてほしいと願

い、本題材を構想した。

②題材の実際

「みんなでつくる『あゆみ SONG』」（音楽づくり）（全 9 時間）	
第①時	A と B の曲を聴き比べよう <ul style="list-style-type: none"> ・伴奏の和音が異なる「茶色の小びん」を聴き、感じたことを共有した ・和音と旋律の関係について楽譜をもとに考え確認した
第②時	和音について知ろう <ul style="list-style-type: none"> ・二つ以上の音の重なりを和音ということを知り、C、F、G の和音を聴き比べた ・声を重ねたり楽器で演奏したりしながら和音の違いを味わった
第③時	コード進行について知ろう <ul style="list-style-type: none"> ・和音の移り変わりをコード進行ということを知り、7 種類のコード進行を聴いた ・コード進行によって雰囲気が変化することを共有し学級ソングに合うコード進行を選択した
第④時 第⑤時	和音に合った旋律をつくろう <ul style="list-style-type: none"> ・和音の音を確認してから自分の担当する歌詞に合う旋律をつくり始めた ・いろんなパターンの旋律をつくり友達と聴き合った
第⑥時 第⑦時	つくった旋律をつなげてみよう <ul style="list-style-type: none"> ・前後の小節を担当する友達と旋律をつなげて聴いた感想を伝え合った ・旋律のバランスやつながりを考え自分の旋律を見直した
第⑧時	A メロ、B メロ、サビのセクションに分かれて旋律を考えよう <ul style="list-style-type: none"> ・つなげた旋律を聴き、感じたことを共有した ・できた旋律を歌ったり旋律を見直したりしながら旋律の完成を目指した
第⑨時	学級ソング全体の旋律を聴いて感じたことを話し合おう <ul style="list-style-type: none"> ・つなげた学級ソング全体の旋律を聴き、感じたことを共有した ・実際に歌ったり、旋律を修正したりしながら学級ソングの旋律が完成した

③抽出児の『その子らしく学ぶ』

ア 音楽を形づくっている要素に着目し、試行錯誤しながら目指す表現に近づける姿

F 子は本実践の中で、和音の響きに着目しながら旋律をつくったり曲を聴いたりする姿や音楽の縦と横の関係に着目しながら和音の響きと旋律のズレを修正することにこだわる姿が多く見られた。

第①時、A（原曲のコード進行）と B（全て C コード）の「茶色の小びん」を聴き比べた F 子は「A は、左手の音が右手に合わせて変わっている」「B は、左手の音がずっと一緒に右手の音（旋律）に合っていないでバランスが悪い」とワークシートに書いた。このことから、F 子は旋律と和音には相性の合うものがあるということを理解していることが分かる。そして、配られた楽譜を見ながら教師にもう一度曲を聴きたいと申し出て、楽譜を見ながら A と B の曲を何度も聴く姿があった。



図 3-1
和音を聴きながら旋律をつくる F 子

第④時、和音に合った旋律をつくり始めた場面では、旋律をつくり始める前に自分の担当する C コードの和音を何度も聴いていた。（図 3-1）そして、和音の構成音である「ドドドド」「ミミミミ」を録音し和音と合わせて何度も聴いた。このように、F 子は自分のつくった旋律を和音と合わせて何度も聴きながら旋律をつくる姿があった。

第⑤時、自分のつくった旋律を友達とつなげる場面では「音が低すぎてうまくつながらない」という G 子に対して「メロディーは変えずに（次を担当する）H 子の旋律を 1 オクターブ下げた方が合いそう」と音の高低による旋律のつながりを意識した発言をしていた。また、H 子のつくった旋律が変わってし

まわらないように写真を撮って保存したり、編集する際は F 子が率先して iPad を操作したりした。そして「待って、一回聴く」と確認したり「一回こっちにしてみたい?」「なんか違う、ここを一つ上げる?」など、何度もくり返し聴きながら確認し修正する姿があった。おそらく、つくった旋律と和音の響きの関係や旋律のつながり、和音のタイミングと旋律のリズムなど、様々な音楽を形づくっている要素に着目しながら試行錯誤していたのだろう。そして、何度もくり返し聴きながら確認し、修正することで、自分の中で納得のいく旋律をつくっていったのだろう。

第⑧時、できた旋律に合わせて歌う場面では、歌った録音を聴きながら「(旋律と歌が)ずれてる」とつぶやき、録音した歌と旋律が合うようにプロジェクトを修正した。その際もずれている部分の旋律を何度もくり返し聴き、修正できたか確認する姿があった。自分の担当する A メロが完成したため、サビの旋律を手伝うことになったが、サビの旋律を聴いた際も「このタイミングがずれてるから一回こっちに動かしてみたい?」と和音と旋律の入りのタイミングのズレを修正した。

このように、F 子は音楽を聴く際、音楽を形づくっている要素に着目しながら聴いている様子が多く見られ、何度もくり返し聴くことで和音の響きに合っているか確認したり和音と旋律のズレを修正したりしていた。何度もくり返し聴いて修正するという試行錯誤によって、自分の目指す表現に近づけていったのだろう。

イ 和音の移り変わりや旋律のつながりを意識しながら旋律をつくる姿

第④時、和音に合った旋律をつくり始めた F 子は、自分の担当する C コードだけでなく様々なコードを弾きながら和音の違いを聴き比べる姿があった。これは、自分の旋律はもちろん、その前後の小節のコード進行を意識していたのではないかと考える。普段から周囲をよく見たり、見通しをもって活動に取り組んだりする F 子だからこその行動だろう。その後、黒板に貼られた歌詞の分担とコード進行が書かれた紙を写真に撮り、じっと眺める姿が見られた。これらの姿から F 子は、自分の担当する歌詞だけでなく、曲全体を意識しながら旋律をつくらうとしていたことがうかがえる。

第⑤時が始まるとすぐに「できた?」と F 子の前の小節を担当する I 子に確認をする姿があった。そして F 子の後ろの小節を担当する G 子と H 子のもとへ向かい「もう合わせ始める? どうせ変わるじゃん」と声をかけた。これらの行動は、自分の旋律をつくってからつなげるのではなく、友達の旋律を聴いてからつくることで、つながりを意識できると考えたのだろう。G 子の旋律を聴き「なんか違う。一回こっちにしてみたい?」と旋律のつながりを意識して修正したり、「最初の音を変えるならファかな?」と和音の構成音を考えて音を変えたりする姿があった。そして、F 子の後の旋律を担当する G 子の旋律がある程度固まると「これに合わせて(私たちが)つくればいいんじゃない?」と旋律のつながりを意識しながら自分の旋律をつくる姿が見られた。

第⑦時、できた旋律を A メロのメンバーで歌い、声を録音する姿があった。
(図 3-2) これは、学級ソングという目指す表現に向けて、実際に歌ってみたらどう聴こえるのかを試していたのだろう。そして、歌声が入ったプロジェクトを聴いて、A メロの最後が B メロとかぶっていることに気付いた。これに対して「じゃあここで重ねる?」と二部合唱に分かれて音を重ねたらどうかと提案した。この提案から F 子の中で、二部に分かれて歌い、歌声を重ねることをイメージしていたのではないかと考える。A メロだけでなく B メロにどうつなげていくかを意識している F 子だからこそ、音を重ねるという発想に至ったのだと考える。



図 3-2 A メロのメンバーで歌う F 子

ウ 他者と関わる中で思いが強まり達成感や満足感を得る姿

F 子は、友達と自分の考えがずれた際、相手の考えに合わせる傾向がある。これは、自分の考えを押し進めるより、相手に合わせた方が合理的で円滑に進むと考えている F 子だからこその行動だと考える。だが、本実践において、F 子の他者との関わりに目を向けてみると、その「相手に合わせる」という行動は、合理性を考えているからだけではないことが見えてきた。

第⑤時、友達と旋律をつなぎ始める場面で F 子は、自分の旋律が決まっていない状態で友達の旋律を聴きに行った。これは、一人ひとりつくってからつなげるより、近くの旋律を担当する友達と一緒につ

くった方が効率的であると考えたからこそその行動だろう。また、友達のつくった旋律がF子の「目指す表現」と近かったことで、F子の「目指す表現」がより明確になった。再度自分の旋律をつくる際には、G子のつくった旋律がファの音で始まっていることを確認し、そこにつながるように旋律を考える姿もあった。しかし、つくった旋律を実際につなげた際のF子は「なんか違う」と納得していない様子だった。自分の中でつながりを意識してつくったはずの旋律がうまくつながらないという状況はF子の試行錯誤を加速させるきっかけとなり、旋律のつながりを意識して「なんとか友達の旋律と自分の旋律を合わせたい」という思いを強めたのではないかと考える。これらの姿はF子の中に「目指す表現」が明確にあったからこそその行動だろう。

第⑥時、自分がつくった旋律を前後の友達とつなげる場面では、旋律を口ずさみながらつなげる姿が見られた。前時でうまくつなげなかった旋律がようやくつながり、自分のつくった旋律に満足していたからこそその表れだろう。そして、つなげた旋律を何度も聴きながら



図 3-3 つなげた旋律を何度も聴き試行錯誤する F 子

「音を細かくしたらどうなるか」と四分音符を八分音符に変えてみたり、G子に「前時に新しくつくっていた旋律をつなげてみたらどうか」と提案したりしながら旋律を完成させた。(図 3-3) つくった旋律を聴きながら「いいんじゃない？もうこれでいいんじゃない？」という発言があったことから、試行錯誤する中で自分の目指す表現に近い旋律ができたのではないかと考える。そして、自分たちの前の旋律を担当するグループに声をかけ、旋律をつなげようとする姿が見られた。

このような姿から、F子は他者と関わる中で、自分の思いを強くし「自分の目指す表現」に近づけていったと考えられる。旋律をつなげた際にうまくつながらないという経験をしたことで、より旋律のつながりを意識しながら旋律をつくる姿が見られ、それによってF子なりの達成感や満足感を得ることができたのだろう。また、F子が相手の考えに合わせる際、自分の考えより相手の考えをよいものとして優先しているのではなく「目指す表現に向かうために相手に合わせたい」というF子の思いを強めているゆえの行動であるということが見えてきた。

4. 音楽科部が見出した『その子らしく学ぶ』研究の価値や可能性～心の動きを伴う経験によってその子に還るものを視点として～

(1) 成果

① 試行錯誤している場面に焦点をあて、目指す表現に向かう子どもの思考をとらえることで「その子らしさ」がより明確に見える

実践(2)におけるC子は、音色ジャンケンを完成させるために何度も同じ楽器を鳴らし、その音色をじっくり確かめながら聴く姿があった。このような姿から、C子は自分の思いや考えをより正確に音や言葉で表現しようとする中で試行錯誤が生まれていったと考える。「音色ジャンケンを考えよう」と投げかけられた際には、どの楽器をどのように鳴らせばよいのかというイメージがもてず首を傾げていた。しかし、実際に鳴らし方やリズムを変えて何度も楽器を試す中で、C子にとってのグーの音色、チョキの音色、パーの音色といったジャンケンと音色とを結びつけた自分なりの正解(目指す表現)をもつことができ、音色ジャンケンの完成に至ったのだろう。試行錯誤している場面に焦点をあて、何度も同じ楽器を鳴らし、その音色をじっくり確かめながら聴くC子の姿をとらえることで、自分の思いや考えをより正確に言葉で表現しようとするC子の「その子らしさ」が明確になった。

実践(3)におけるF子は、和音の響きと旋律のズレにこだわり何度も修正したり、その旋律をくり返し聴いたりする姿があった。このような姿から、F子は和音の響きに合っているか確認したり和音と旋律のズレを修正したりしながら、自分の目指す表現に近づけようとしていたと考える。そのため、旋律をつくる際に、和音と旋律が合うように和音の構成音を意識しながら旋律をつくったり、できた旋律と歌声がずれていることに気付き「修正してから聴く」という作業を何度もくり返ししながら修正したりしたのだろう。そして、自分の中で納得いく旋律をつくることができたのだと考える。試行錯誤している場面に焦点をあて、ズレにこだわりながら旋律をつくろうとするF子をとらえることで、自分の納得

がいくまで旋律を修正したり、その旋律を何度もくり返し聴いたりしながら目指す表現に近づけようと粘り強く取り組むF子の「その子らしさ」が明確になった。

このように、自分の思いや考えを正確に音や言葉で表現しようとしたり、自分の納得がいくまで旋律を修正したり、できた旋律を何度もくり返し聴いたりしながら粘り強く取り組む姿こそ、「その子らしさ」が明確になった姿であり、そこには必ずその子にとっての「目指す表現」が存在していた。

②「自分の目指す表現」に向かってその子がこだわることができる環境を設定することで、達成感や満足感を得たり、音楽のよさに気付いたりする

実践（１）におけるA男は、「音を揃える」ということにこだわり、何度もグループの友達に声をかける姿があった。このような姿から、A男は「合奏」において「音を揃える」ことを目指していたのではないかと考える。そのため、練習で音が揃わなかった際「打楽器を使ってリズムをとった方がいいと思う」と新しい提案をしたり、拍にずれてしまう友達に「合わせて」と声をかけたりしたのだろう。「音を揃える」ことにこだわりながら何度も練習を重ねることで、音が揃ったときの達成感を得たり、音を揃えることで生まれる一体感から、改めてみんなで一つの演奏をすることで生まれる音楽のよさを感じたりすることができたのではないかと考える。

実践（２）におけるC子は、トライアングルの音色にこだわって様々な鳴らし方を考えたり、歌に合う音色を考えて演奏したりする姿が見られた。このような姿から、C子は「もっといい音を見つけてみたい」「この音色がぴったりだからこの鳴らし方にしよう」と音色に対する思いや考えを強めていったと考える。そのため、音色研究の多くの時間をトライアングルに費やし、じっくり音色を聴く中で内側と外側の音色、連打した時の音色、地面に付けて鳴らした時の音色、ビーターの本数を増やした時の音色など、様々な鳴らし方を見つけることができたのではないかと考える。また歌の歌詞に合うたたき方を見つけ、いつも同じ音色になるように鳴らし方にこだわることもできたのだろう。

このように、達成感や満足感を得たり、音楽のよさに気付いたりした姿から「自分の目指す表現」に向かってその子がこだわることができる環境を設定することで、『その子らしく学ぶ』を保障できると言えるだろう。

③ 他者との関わりによって自分の目指す表現が更新されたり、その子の考えが変容したりする

『その子らしく学ぶ』その子は、他者の『その子らしく学ぶ』にふれながら学びを進めている。今回行った3つの実践すべてで、他者との関わりによって自分の目指す表現が更新されたりその子の考えや行動が変容したりする姿があった。

実践（１）におけるA男は、自分と他者の考えに違いが生じた際、自分の「目指す表現」を更新したり、他者の考えに納得し、自分の考えを変えたりする姿が見られた。このような姿からA男は、自分の「目指す表現」が明確にあり、そこに向かう中で他者の価値観にふれ、自分の「目指す表現」に近づけるために他者の考えを受け入れたのではないかと考える。そのため、第②時で楽器を決める話し合いの際には、相手の「主な旋律の楽器が鉄琴と木琴」という意見が自分の「目指す表現」と合うかどうかを判断するために、実際に演奏されたデモ音源で確認しようとしたのだろう。また、第⑦時まで、小太鼓をメトロノームのかわりとして使っていたA男が「太鼓は曲を盛り上げるために入れたい」という他者の考えにふれたことで、「単なる音を合わせるための小太鼓」という考えから「曲を盛り上げるための小太鼓」というようにA男の小太鼓の役割に対する考えの変容が見られた。

実践（２）におけるC子は、自分と他者の考えに違いが生じた際、他者の考えに合わせて活動を進めたり、同じようにワークシートを書いたりする姿が見られた。このような姿からC子は、目指す表現が明確にもてていない時には、他者と共に活動を進めることで安心感を抱いていたと考える。そのため、第①時や第②時でのC子は、常にD子と活動を共にし、身の周りの音の聴こえ方や楽器の音色についての自分の思いや考えを必ずD子へ伝えていたのではないかと考える。しかし、単元が進み自分の目指す表現が明確にもてたC子は、誰と活動するかよりも目指す表現の実現に向かって何をすべきかを大事にした。そのため第④時ではD子という他者との結び付きよりも、楽器との結び付きを強めたのではないかと考える。

(2) 課題

① 一つのものをつくりあげる活動におけるその子の「目指す表現」を検証していくこと

これまでの実践で、自分の「目指す表現」があることでその子の学びが促進されたり、自分の「目指す表現」に向かう子どもを教師が支えることで、達成感や満足感を得たり音楽のよさに気付いたりすることが明らかになった。題材の中で「どんな演奏にしたいか」「どんな旋律をつくりたいか」などを考える際に、その子がもつ思いは一人ひとり異なる。その思いが音や音楽と関わる中で明確になっていき「目指す表現」が生まれる。だからこそ、合唱や合奏のように一つのを全員でつくりあげるという活動において、その子の思いや「目指す表現」はどう変化していくのかを検証していきたいと考える。

② 「目指す表現」に向かうその子とその子の関わりを検証していくこと

『その子らしく学ぶ』その子は、他者の『その子らしく学ぶ』にふれながら学びを進めている。今回行った3つの実践すべてで、他者との関わりによって自分の目指す表現が更新されたり、その子の考えや行動が変容したりする姿があった。自分の「目指す表現」に近づいたとその子が判断できるのは、他者の「目指す表現」にふれたり、他者から認められたりすることが必要なのではないかと考えている。だからこそ、その子が自分の「目指す表現」に向かう中で他者の「目指す表現」にふれる場面や他者からの意見にふれる場面に焦点を当てて検証していきたいと考える。

5. おわりに

今年度の実践より、自分の「目指す表現」に向かって試行錯誤する子どもの学びを「心の動きを伴う経験によってその子に還るもの」という視点で『その子らしく学ぶ』をよりつぶさに見取り「音楽科における学び」や『その子らしく学ぶ』の可能性を広く深く探っていくことで、多くの成果を得ることができ、それと同時に価値を見出せた。研究4年次では、他者との関わりに焦点をあて、『その子らしく学ぶ』その子とその子がどのような学びをしているのかを検証し、『その子らしく学ぶ』の価値をさらに見出していきたい。